

## Comparative Literature 比較文学専修

比較文学は、主に西洋と日本の近代文学の相互関係を研究する学問です。ただ個々の作品の影響関係を貸借表や成分表示のように並べるだけではありません。そうした「西洋」の近代文学を受容する必要が生まれた文学のグローバルゼーションという大前提や、それに対する抵抗や独自の変容についても検討する必要があります。

例えば、オリエンタリズムやジャポニズムといった西洋の東洋に対する関心は、日本でどのように交錯したのか、その結果、「日本」や「西洋」という枠組み自体が、どのように作られ、変化していったのか、そのような相互交渉を扱うことこそが比較文学の本領といえます。

このほか、ある主題について世界の文学を横断するテーマ研究、絵画と文学などのジャンル間交渉、世界の各帝国と（脱）植民地主義をめぐる問題も比較文学の対象となります。したがって、近代文学といっても、狭義の小説だけではありません。絵画、演劇、映画および漫画も含む広義の物語とその越境が研究対象になります。

いずれにせよ、一方ともう一方を比較する以上、その両方について綿密な調査と実証が欠かせません。そして両者の比較を可能にするだけの確かな外国語運用能力と厳密な方法論も求められることとなります。

### 教員

はしもと・よりみつ  
橋本順光 教授  
すずき・あきよ  
鈴木暁世 准教授

上左：米倉壽仁『透明ナ歳月：詩集』、西東書林、昭12。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1207633> で通信公開されています。原画は山梨県立美術館所蔵。

上右：Wikimedia CommonsのHecataeus world mapで公開されています。

<https://researchmap.jp/yorimitsu-hashimoto> (橋本順光教授の研究紹介)

<https://miraibook.jp/researcher/715> (橋本順光教授の研究紹介)

<https://researchmap.jp/read0134213> (鈴木暁世准教授の研究紹介)

### 何を学んでいるの？

#### 比較文学入門

現代の小説や映画が、どのようにして世界中で共有されるようになったのか、その経緯について、西洋文学の大きな流れや各地での衝撃や衝突を概観し、分析するための理論を学びます。

#### 比較文学講義

日本の近代文学はどのように海外の文学潮流と関わってきたのか、文学の流行現象が起きるのはどのような時か、文学作品を精読することによって文学研究の基盤となる方法を学ぶと共に、翻訳、流通、メディア等の文学を取り巻く環境を考えることで探っていきます。

### どんな授業があるの？

#### 〔講義題目〕

オリエンタリズム研究と比較文学  
世界のなかの日本近代文学

#### 〔演習題目〕

オリエンタリズム小説と近代日本  
芥川龍之介の作品を読む

### 教員が選ぶ印象に残った卒業論文

#### 国語教科書における戦争表象と「夏の葬列」

偶然、芋畑で葬列を目にした「私」が、疎開先で機銃掃射された時の記憶を蘇らせ、衝撃の事実を知る山川方夫の「夏の葬列」(1962)。いわゆる反戦文学に見えて、よく読むとそれだけではない仕組みが見えてきます。厳密なはずの国語教育の揺らぎを、挿絵に注目することで跡付けようとする着眼点が秀逸です。(選：橋本順光 教授)

#### 〔卒業論文題目〕

日本のシルクロード発見と奈良幻想  
高橋たか子にみる人形愛と翻訳改変  
ハリウッド映画の『キング・コング』的想像力  
近代における浦島太郎の変容と継承

## 比較文学の糸口としてお薦めの作品を学生に聞きました。

### 作品紹介

『TIGER & BUNNY』(2011)は、両極端なヒーローが衝突しながら成長していくアニメです。よくある物語に見えますが、ヒーローたちのスーツには実在の大企業のロゴが描かれています。彼らが戦っているのは1秒でも長くロゴを中継TVで映すためなのです。作品内でさりげなく商品を登場させて企業から協賛金をもらうプロダクトプレイスメント。これをあえて表に出したわけです。当然、ヒーローの正義はスポンサー企業と衝突します。正義も作品も経済優先な状況を批判しつつ、実際のスポンサーは貶めないバランスは絶妙。こうした「広告」が当たり前になった今こそ見直すべき作品です。(4年)

### 教員からの付記

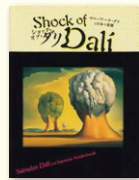
昭和の特撮やアニメは、番組全部がCMじゃないかとしばしば皮肉られました。例えば玩具会社がスポンサーの場合、本編もキャラクター商品の広告といえば広告になりますし、実際、その収益は大きかったからです。とはいえ、商品が売れるのは番組の面白さあってのこと。『TIGER & BUNNY』を製作したのは、それまで広告と揶揄されたロボットアニメを大きく作り変えた会社です。1970年代に同社は、批判を逆手にとって、子供向けロボットアニメではまず疑われなかった正義と経済活動にみる「大人の都合」を見事な娯楽にして、大きく時代とアニメを変えまし

た。以来、その姿勢は一貫しているのかもしれませんが。

ちなみにプロダクトプレイスメントは、町山智浩によれば、1980年代にスピルバーグが『バック・トゥ・ザ・フューチャー』で取り入れて以降、映画製作の主流になったそうです。観光や移住を見込んだ自治体が、ご当地で撮影する地方創生映画や作品製作を依頼するアーティスト・イン・レジデンスも、同じ潮流といえるかもしれません。作品と資本が切り離せない以上、作品はどこまで広告ないし商品なのか。この問題はますます見えにくく、しかし、いっそう深刻に問われていると言えるでしょう。



『教科書に載ってない USA語録』  
町山智浩：著  
文藝春秋／2012



『ショック・オプ・ダリ  
——サルバドル・ダリと  
日本の前衛』速水豊ほか編著  
三重県立美術館／2021



『アメリカ1920年代  
——ローリング・トウェン  
ティーズの光と影』  
英米文化学会編  
金星堂／2004



Mats Andrén, *Thinking Europe: A History of the European Idea since 1800* (NY: Berghahn Books, 2023)  
オープンアクセスのため以下で無料公開  
(<https://www.jstor.org/stable/j.ctv336cj83p>)

## 身近な読書から始める比較文学

### 書籍紹介

SNSに流した言葉が、思いもかけず反響を呼んで「バズる」ことがあります。手紙を瓶の中に入れて海に流す作業にも似て、どこに流れ着くのか、そもそもそれが読まれるのか。虚しい作業に思えたのが、急に注目され、書いたものが一人歩きし始める。20世紀までならもっぱら作家に起こった悲喜劇が、今や多くの人に実感されるようになりました。

そんな「バズる」不思議を見事な詩にしたのがヴァレリーといえるかもしれません。彼の「失われた美酒」では、海に注いだワインが、消えるかと見えて波から幻像を出現させます。人間の叡智が、理屈では説明で

きない「拡散」をもたらすという希望を込めたのでしょうか。ただヴァレリーは、同じような比喻を「精神の危機」という論説でも用いていて、ヨーロッパが世界の頭脳という特権的地位を失い、そこから生まれた科学が一人歩きすることも危惧しています。これらヴァレリーの詩文は、アメリカでは反面教師となり、1930年代後半には、だから日本で新たな文明や近代が生まれるという奇妙な高揚感を煽ることになります。

米倉壽仁の《ヨーロッパの危機》(1936)はそんな空気をよく伝えていきます(左頁上左)。紹介されたばかりのダリを参考にして、米倉

は、古代ギリシャのヘカタイオスに基づくヨーロッパの古地図(左頁上右)を頭蓋骨に重ねます。米倉はこの絵を掲載した詩集で何度もヴァレリーに言及しているので、世界の頭脳を自認してきたヨーロッパがユーラシア大陸の半島という地位に転落するかもしれないという、「精神の危機」を意識したのでしょうか。この絵でヨーロッパは小さな半島でしかありません。ただし、この頭蓋骨、アジアあたりから飛び出しているのは、何やら得体の知れない物体。まさにヴァレリーのいうように、彼の言葉は予想だにしない幻像を生み出したといえるのかもしれませんが。